

三陸の近景

①

震災を語り継ぐ

手元に、東北で発刊されている新聞があります。5月9日の日付の入った新聞です。1面には、死亡広告が掲載されています。震災で亡くなられた方のご遺体が発見されたという内容です。

京都で読む新聞とは、紙面の様子も全く違います。全面広告となっている紙面以外のすべてに、震災関連の記事が掲載されています。再生に向けての行政の動き、復興の様子を知らせる情報、被災地で催される音楽会。被災地のニュースは、まだまだ震災関連のものばかりです。

最近、記事内容に変化が生まれています。被災者一人一人の思いを語り継ごうという動きが、顕著になっているのです。当初は、人

々の感情に焦点を当てた記事は、被災地の人々にとって悲痛すぎるものとの判断がありました。しかし、今は「語り継ごう」という強い思いが、東北の人々の間に生まれてきています。

今回の津波で、「津波石」が姿を現しました。津波は、巨大な石を内陸奥深くまで運びました。かつて、その被害に遭遇した人々が、この石に津波で運ばれた石であることを刻み込んだのです。それが、いつのまにか、埋もれ、巨石がそこに有ったことさえも記憶から失われていました。それが、50年の時間を超えて、姿を現したのです。

私たちの記憶は、実に心許ないものですが、悲痛な記憶を後世に繋いでいくことは、未来をひらく



『ボランティア僧侶』藤丸智雄著
同文館出版刊 1365円

大切な糧ともなります。浄土真宗本願寺派総合研究所からは、今も2人の研究員が被災地に入って活動しています。研究員の聴く活動を通して伝わってきた被災地の人々の思いを伝えるために、今年3月、『ボランティア僧侶』を発刊しました。しかし、終わったわけではありません。本欄では、これから10回（月1回掲載予定）にわたって、被災地の様子を伝えていきます。（藤丸智雄）